異世界転生～生まれた時から世界最強～

呪われし咎人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、青年は、トラックに引かれかけた少年を助け、命を落とす。しかし、青年は神により、便利な能力を貰い、第二の人生をスタートさせる……　のだが。

「便利な能力処か、チートなんですが？」

そんな、青年の物語

目　次

プロローグ～転生そして成長～
プロローグ ―――― 1
意識は戻りましたが、早く大人になりたい ―――― 6
せかいのれきし ―――― 10
ダサい父様 ―――― 16
第1章～アライアンス学園にて……～
Sクラス ―――― 23

プロローグ～転生そして成長～

プロローグ

　その日俺は日課どおりランニングをしていた。すこしでもサボるとすぐに体がなまるからここ2・3年欠かしたことのない習慣だ。いつも通る交差点が見える場所まで来たとき前方を中学生くらいの少年が音楽を聞きながら歩いていた。いつもなら特に何も感じずにとおり過ぎていただろう。だが俺は見てしまった、そう、見てしまったのだ。その少年が渡っている時に大型トラックがまったくスピードを落とさずに突っ込んでいくのを。

「危ない!!」

　叫んでも音楽を聞いているせいか気づく様子がない。俺は猛然とダッシュをした。普段から鍛えているおかげかなんとか間に合い少年を突き飛ばすことに成功する。やった!!と思った瞬間大型トラックが俺に突っ込んできた。あまりにも簡単に俺はぶっ飛ばされた。不思議と痛みはなかった。だが自分の体の中から力が抜けていくのはわかった。自然に自分が死ぬということが理解できた。短すぎる人生だった。もっと長く生きたかった。そう思った瞬間俺の命は消えた……　はずだった。

「そんなわけで君を転生させてあげるよ!」

　目の前で俺に向かって少々偉そうになにか言ってたやつが俺を見てくる。だが申し訳ないんだが死んだときの回想をしていたせいでよく話を聞いてなかった。

「すいません。もう一度言ってください」

「えー!ちゃんと聞いといてよね。いい?僕は神様で君は今日一万人目に死んだ人なんだ!だから転生させてあげるよ。おまけになにか便利な能力もつけてね」

　今度はしっかり聞いた。

「やっぱり俺は死んだんですか?」

「うんそりゃあ見事な死に方だったよ。トラックに轢かれて即死。痛

みも感じなかったんじゃないかな？」
　確かに痛みも感じなかったが。
「転生って地球にですか？」
「どこでもいいよ。地球でもほかの世界でも」
「ほかの世界って異世界のことですか？」
「うん。いろいろあるよ。科学が発達した世界、魔法がある世界、科学と魔法両方発達した世界」
　本当にあるのか異世界。だけどどれに転生すればいいのか迷うな。
「僕的にはオススメは魔法がある世界かな」
「なんでですか？」
「科学文明が発達した世界は汚いからね。その点魔法だけの世界は綺麗だよ」
　そうか環境問題か。地球でもいろいろ問題になってたからな。それに魔法と聞いたら行くしかないな。というか神様なのに随分現実的だな。
「じゃあ、魔法がある世界で。お願いします」
「じゃあ次は転生する世界での君についていろいろ決めていこう」
「いろいろってなんですか」
「名前とかスキルとか顔とか家とか」
　ようするに転生におなじみのチートをもらう展開か。
「じゃあこの紙に書いてね」
　そう言われていろいろ質問が書いてある紙とペンを渡された。アンケート用紙かよ。
　最初は名前か。名前は別にいいや転生先の親に決めてもらおう。次に性別は男。家庭は貧乏すぎるのはいやだし、良い暮らしがしたいから、武官家で最上級貴族。髪の色は銀髪。顔は線が細いイケメン。身長は高め。これくらいかな？
「書けました。」
「どれどれ……　よしじゃあ次はスキルだね」
　おおついにチートか。
「といってもユニークスキルは僕が決めるから君が選ぶのは普通のス

キルと武器なんだけどね。あっユニークスキルってのはその人だけのスキルのことね。魔法の場合は固有魔法っていうよ」
「どんなユニークスキルをくれるんですか？」
「それは後のお楽しみってことで。先に武器とスキルを選んでよ。この中からさ。スキルは6個武器は1個」
神がそう言った瞬間俺の前に透明なタブレットのようなものが出てきてそれには色んなスキルが書いてあった。ここから選べばいいらしい。
「どれどれ」
流し読みしつつ気になったのを挙げてく。
結果　魔法適正（全）　魔力消費軽減　体術　身体強化　剣術
空間把握　魔流　縮地
索敵

この9つが残った。魔法は後でも習得できるだろうし。それぞれ説明していくと魔法適正（全）、魔力消費軽減、体術、身体強化、剣術はそのまんま。
空間把握は自分を中心に半径１００メートルを正確に把握することができる。
索敵は半径1キロを大体把握することができる。
魔流は魔力を全身に好きに配分できるようになる。魔力が高い部分は固くなり魔力を解放すればそれだけで攻撃になる。後、魔力操作が上手くなったり、魔力量が増えたりする。
縮地は簡単に言えば高速で移動できるようになる。
空間把握と索敵がかぶってる。どちらかをなくさなきゃいけないんだが、やっぱり１００メートルでも正確に把握できるほうがいいだろうと空間把握を選ぶ。ちなみに剣術は前世でも習っていたから選んだ。
「決まりました」
「見して。魔法適正（全）、身体強化、剣術、空間把握、魔流、縮地か。剣術ってことは武器は当然……　やっぱりデュランダルか！」

デュランダルを発見したときは興奮した。だってデュランダルといったら攻撃力最強の聖剣じゃないか。
「武器は神様サービスで異空間にしまっておけるようにしたよ。小さい時困るだろうからね」
「有り難うございます」
「いやいいよ。僕も久しぶりに人と話して楽しかったし」
まさかこの神様ボッチなのか？神様なのに？
「なに考えてるのかな？」
神様がイイ笑顔で怒るという器用なことをしてくれた。
「なっ、なにも考えてませんよ」
「ならいいんだけどさ」
ふう、どうやら誤魔化せたようだ。
「最後に2つまず君は最初から異世界の言語を読めるし書けるし話せるよ」
それはありがたい。最初から学ぶのは大変だからな。
「そしてもう一つ君の意識は丁度君が一歳になると覚醒するけどそれでもいいかい？」
「なんでそんなことするんですか？」
「最初から意識があると赤ん坊の真似とかをしないといけないから大変だよ？」
それは確かに大変そうだ。
「そのままでいいです」
「でしょ。あと君が一歳になれば頭の中でステータスって念じると自分のステータスが見れるよ。あとユニークスキルについてはそのときに説明するね」
ユニークスキルかすっかり忘れてた。どんなのだろうか楽しみである。
「あっ!!聞き忘れてたんですけど異世界人は魔法使えないなんてありませんよね」
「えーとたぶん大丈夫」
「たぶんってなんですか、たぶんって」

「いやね君にユニークスキルあげるじゃん？向こうの世界では強力なユニークスキルや固有魔法持っている人は魔法やスキルが使えなかったりするんだよね」
「じゃあ俺の場合はどうなるんですか!?」
「うーん魔法とかが使えない理由がその人の才能の容量オーバーみたいな理由なんだよね。だから中にはユニークスキルも使えて魔法も使えちゃう人もいるんだ。まあ簡単に言うと君が才能溢れる天才であることを祈る、」
「ええ!?それはあんまりじゃ」
しかし俺の発言を遮って神が
「はいはい、じゃあいよいよ異世界の旅にいってらしゃい」
その声とともに徐々に意識が消えていく。
覚醒は突然やって来た。

意識は戻りましたが、早く大人になりたい

皆さん、元気ですか?僕は、元気です。
突然ですが意識が戻った青年Ａです。前世の名前が思い出せません。どうやら、1歳に成ったようです。今、家族は、誕生日パーティーをしてくれてるみたいです。さて、話が少し変わりますが、家族構成を説明してみたい、と思います
先ずは俺の正面。厳つい顔をしているおじさんだ。おそらくこの人が俺の父親。普段は厳しそうだが今は口が緩んでいる。
その右隣にいる１２歳位の少年。おそらく俺の兄さんだろう。かなりイケメンだ。これなら俺も期待できる。
父さんの左隣は父さんと同じくらいの歳の女の人。俺の母親だろう。優しそうだ。
そしてさらにその横5歳位の女の子がいる。結構可愛い。俺の姉さんだろう。
他には誰もテーブルについていないので恐れくこれで俺の家族は全部。父、母、兄、姉そして俺。なかなかバランスがいい家族だ。
俺の誕生日会も終盤に差し掛かる。すると母さんが
「みんなそろそろエリーにプレゼントを渡しましょう」
と言った。確かに誕生日と言えばプレゼントである。だが所詮一歳児にあげるプレゼントだ。たかが知れているだろうと思っていると、母さんが俺を椅子から降ろした。キョトンとしていると父さんが俺の前に何かを置いていく。
「エリー分からないだろうが良く聞け。今からやるのは我がノワール家に代々伝わるお前の今後をも決めるものだ。我がノワール家は王家の剣。王家の剣の名に恥じぬよう、お前は、強くならねばならん。今お前の前にはいくつもの木でできた武器がある。その中から自分が取りたいと思う物を取れ。それがこれからの人生でのお前の武器となる」
なるほど。さすが武官の家。こうやって武器を選ばせるのか。
俺の目の前には幾つもの武器が置いてある。弓、杖、剣、槍、棍、鉈、

手甲足甲、刀、ダガー、棒。
確かに多い。しかし俺の選ぶものは既に決まっている。正直あって良かった。そして俺は迷うことなく剣を手にする。
「そうかお前はそれがいいか?ならば今から4年間まずはそれを肌身離さず持ってなさい。そして5歳になったら武術の修行の開始だ」
どうやら最初は武器に愛着を持たせるらしい。そして修行ができる歳になったら修行開始ってところか。
父さんはそれだけ言うとまた席につき
「ほら早くパーティーを再開するぞ」
と言った。パーティーはなかなか楽しかった。
さて今はパーティーが終わり自室で一人、ではなくお付き兼護衛としてメイドさんが一緒にいる。まさに戦うメイドさんである。ホウキで戦うのだろうか?
などと考えていたせいで忘れる所だった。そう神様サービスのステータスである。早速ステータスと念じると頭の中に浮かび上がってきた。
名前　エリオット・ノワール
性別　男
種族　人間
状態　正常
スキル　魔法適正（全）・身体強化・剣術・空間把握・魔流・縮地・アイテムルーム

メッセージがあります
ステータスの一番下にメッセージマークがあった。取り敢えずタッチしてみると頭の中にメッセージが流れた。
やあ久しぶりエリオット君。なんで今の名前を知ってるかだって?神様だからね。
どうだい転生した気分は?まさに心機一転といったところかい?
約束通り君が一歳になったからユニークスキルをあげに来たよ。
スキル名は《魔眼》

効果は、《魅了の魔眼》、《予知の魔眼》、《鑑定の魔眼》の３つが初期能力だよ！　《魅了の魔眼》は、文字道理、人を魅了状態にできるんだ、他も察しの良い君なら解るかな？《予知の魔眼》は、予知が、《鑑定の魔眼》は、鑑定ができる、後、魔眼は、２つだけ作れるよ！

ついでに、武器はもう出せるからね！アイテムルームと心の中で唱えると、君だけの空間ができて、そこに物を出し入れできるよ！活用してね？

最後に君の第二の人生が実りあるものであろうことを祈らせてもらうよ。神様だけどね。

ｐｓたまに君の夢に行くかもしれないよ（笑）

メッセージはここで終わってた。《魔眼》か。なかなか便利そうなのを貰ったな。

まだまだスキルについて検証したかったが一歳児の体に今日のは疲れたらしい。眠気に抗えずに寝てしまった。

こうして俺の異世界一日目は終わった。

次の日俺はまず自分のできることから修行を開始する。修行と言っても一歳児ができるレベルだたかが知れてる……　俺もそう思ってた。しかし俺に関しては魔法のみ基礎修行をこの歳でもやることができた。

何故か？

魔流のおかげである。朝起きた俺はまず一つ一つスキルを試していった。

魔法適正（全）は、試しようが無いので、それ以外のスキルをだ。

まず、最初に空間把握。やってみて分かったがこれなかなか制御が。気を付けないと空間を把握するための感覚のようなものが反応しなくなってしまう。しかし一時間ほど練習したらコツを掴めた。自分を中心にロープのようなものがあると考えると分かりやすい。まだまだ未熟だが使いこなせればかなり強力になるだろう。

次は縮地。残念ながらまだ体が小さすぎて出来なかった。剣術も同じく。

次に身体強化。これはなんとなくでしかわからなかった。すこし

動きやすくなった気がするが恐らく体がついていけてないのだろう。
最後に魔流。これは小さくてもできた。まず自分の中に魔力という名前の水が入っているのを想像する。そしてそれを別の部位に動かしていくのだ。最初はゆっくりとしか動かせなかったし、少し動かしただけで非常に疲れたが練習するうちにましになってきた。が、もっとちゃんと動けるようになりたい、あぁ、早く大きくなりたい、憂鬱だ

せかいのれきし

突然だが、次の日から、俺は体が出来るまで魔流と空間把握それと控えめにだが身体強化術の修行をすることにした。それが決定してからの俺の一日の予定は、

朝９：００　起床　子供だから仕方がない

朝９：３０　朝食　食堂で一人でとる。戦うメイドさん（マリーさんという名前らしい）が付き添い

朝１０：００　修行　マリーさんが見ていないのを空間把握で確認して隠れたあと常にマリーさんの１００メートル以内にいるようにしてかくれんぼ。

昼１２：００　昼食　朝食と同じように食べる。

昼１：００　読書　父さんの書斎にこもり魔流の練習をしながら読書

夜７：００　夕食　家族で食べる

夜８：００　修行　魔流の修行

夜９：００　就寝

といった感じである。ほとんど一緒にマリーさんはついてくる。俺になにかあったら困るしね。

隠れんぼは最初は直ぐに見つかったが今は空間把握をうまく使えるようになったためかなり逃げられるようになった。

父さんの書斎で見ている本だがおもに歴史書と魔法書を読んでいる。

最初に神様は動物を作った。そしてその動物に対抗する人間を作り出す。

人間は魔法を発見してそれを使い動物たちから身を守った。動物たちも危害を加えられなければ特に何もしなかった。

しかし時がたつにつれて変化する動物たちがいた。狂暴になり人間を襲うようになったのだ。理由は人間が発見した魔法である。人間が魔法を使うせいで大気中に魔力が溢れてしまい、特にその影響を受けた動物は狂暴になっていった。そしてその動物たちから知識あ

るものが生まれた。人間を襲う者と人間を襲わない者である。
いつしか狂暴になった動物は魔獣、魔獣から生まれて、人間を襲う者は魔族、襲わない者を獣人と呼ぶようになった。人間と魔族は自然と争うようになった。そしてついに第一次人魔大戦が起きる。最初は魔力身体能力両方に優れている魔族が勝っていたが途中から獣人が人間側に協力。これにより一気に形勢は逆転。魔族は北の大地へと追いやられるようになった。
それから数百年後第二次人魔大戦が起きる。しかし今回は前回とは違った。魔族側の人数が少なかったのだ。何故か？それは魔族の中にも人間との共存派が出てきていたのだ。人間は魔族の共存派と裏で繋がり魔族にとっての重要拠点を次々と襲い占領していった。またたくまに形勢不利になっていく魔族。そして前回よりも遥かに短い期間で第二次人魔大戦は終息した。
そのとき今回人間側についた方は魔族たちの大陸の人間側へ、共存否定派は更に奥へと移っていった。現代ではその時共存派についた魔族は一般的には受け入れられている。しかし未だに根強い差別は残っている。また獣人ももとが魔族と同じという理由で差別する人間もいるのだ。
「ふう」
なかなか面白い内容だった。やっぱり獣人はいるようだ。早く会ってみたい。明日はこれの続きを読もう。そう思いながら眠りにつく。
昨日と同じように修行をしていく。1日やったらだいぶ使い易くなった。
さて空間把握の修行も終えたので読書と魔流の修行に移る。読む本は昨日読んでいた歴史書の続きである。昨日は獣人が出てくるところまで読んだはずだ。
魔獣が魔族と獣人の二つに別れたが、実はもう一つ知性を持って進化した者たちがいた。獣人が魔獣の獣の部分を受け継いで進化したとすれば、その者たちは魔獣の魔の部分を受け継いで進化した。今でいうドワーフやエルフのことである。ドラゴンから進化したという

ドラグニルは少し異なる、後に亜人と呼ばれる者たちだ。
最初亜人は森等でひっそりと暮らしていた。しかし第二次人魔大戦で森が荒れてしまい生活を変えなければいけなくなった。亜人たちは人間にはない高度な技術を持っていて人間たちに技術を売って生活するようになった。
第二次人魔大戦から数百年。人間の国は亜人たちの技術を取り入れることによって飛躍的な進歩をした。そしてその頃は数も少なくなっていた共存否定派魔族たちは数が少ないこともあり大人しくなっていた。魔族という共通の敵がいなくなり人間たちは同族で争うようになった。
二つの大国グルズとメイルは最初は小競り合いをそして段々に大きな争いをしていくようになった。そして第二次人魔大戦から５００年。第一次二国大戦が勃発。同じ種族にも関わらずついに戦争を起こすまでになった。しかし今までだったら死者の数もそこまで多くはなかっただろう。一度の戦闘で多くて３０００人程である。しかし人間たちは亜人より高度な技術を取り入れていた。そしてその技術は大量虐殺兵器として戦場にあらわれることになる。
今までとは文字通り桁が違う人数が死んでいく。両国ともこのままでは不味いと思ったがここで引いたら不利な条約を結ばされるのは火を見るより明らか。結果第一次二国大戦は泥沼の争いになっていった。そこに目を着けたのが共存否定派魔族である。彼らは人間の二つの大国が弱っているのをチャンスと見て再び人間たちに牙をむく。
魔族は戦場を急襲して初戦を勝利で飾ろうと考える。そこで次に人間たちが大軍で争う場所に奇襲をかけることにする。作戦決行の日。人間たちは魔族が漁夫の利を得ようとしているとも知らずに戦い始める。そこに魔族が襲いかかった。人間たちの軍は動揺した。ここにいるはずのない魔族という第三勢力に、そして５００年前というほとんど伝説と同じレベルの話の魔族に。人間たちは長い時を経てしまったせいで魔族との戦いかたを忘れてしまっていたのだ。しかし魔族は長生きである。人間たちとは違い人間との戦い方を忘れ

てはいなかった。当然人間は魔族に蹂躙されていく。
　このままでは本当に全滅するかもしれないという時に魔族たちを軽々と倒していく集団があらわれた。彼らは人数は少なくとも戦力はまさに一騎当千だった。彼らのおかげで戦線を持ち直すことができた。しかし戦線を持ち直しても指示をするような高官は魔族に優先的に狙われていて最早数人しか残っていなかった。するとそこで誰かが指揮をとりはじめた。誰に従えばいいのか分からなかった兵士たちは素直にその声に従う。そして徐々にだが魔族たちを押し戻しはじめた。
　これに焦ったのが魔族である。前方では突如整然と行動するようになった軍によって、そして内部では縦横無尽に駆ける少数の戦士たちによって今度は魔族が全滅の憂き目を見る。逃げようとするも少数の戦士たちによって阻まれる。その中でも特に魔族を恐怖に陥れた者がいた。銀髪に白装束で目にも止まらない速さで魔族を切り伏せる男だ。男を見た魔族たちは死にもの狂いで逃げ始める。結果もともと1万人いた魔族であったが逃げきれたのは２０００人いたかどうかだという。人間側の損害は７０００人。もしあそこで戦士と指揮をとったものが現れなければ全滅していた可能性を考るとその二つの集団がどれだけの活躍をしたのか分かるだろう。
　戦士たちのリーダーである銀髪に白装束の男はその後魔族に恐れられ白夜叉と呼ばれるようになった。
　今回の魔族襲撃によって同じ種族で争っていては駄目だとようやく気づいた両国の王は和平調停を結ぶ。さらにそれから5年後両国の王の子供同士に出来た赤子を新たな王として二つの国は一つになり、名前をメイズに改めた。メイズは初代国王の名前でもある。また王族は大量虐殺兵器を危険だとみなしてその全てを亜人に返還した。そして先の大戦で大功を誇った二つの集団のリーダーを中級貴族として登用する。その後、一騎当千の戦士たちは王宮剣術指南役に、指揮をとった者たちは、軍の指揮官や騎士団の団長を代々務めるようになる。それが今のノワール家とエウロス家である。この二つの貴族は、中級貴族、なれども権力は並みの伯爵を凌ぎ、侯爵に届くとさえ

言われている。しかし両家はその権力を無用に使ったりはせずに与えられた仕事を完璧にこなしていた。その時の活躍で両家とも、最上級貴族になった。

これで一件落着・・・ かと思いきや一つ収まりのつかない集団があった。民衆である。今まで苦労して税金を納め一家の働き手である男を差し出したにも関わらずなんの見舞金もない。しかし現状では見舞金など払えるはずもない国はある策を実行にうつす。その策とは大量虐殺兵器を売り付けた亜人にこそ責任があると声だかに主張するものだった。当然そんなことはない。亜人たちの技術を兵器に転用したのは他ならぬ国の上層部である。しかし民衆にとってそんなことは関係がなかった。彼らの目の前には亜人という怒りの捌け口が用意されていた。ならばそれを使うことに何の疑問も抱かずに亜人を非難する。また獣人たちもこの事件を機に迫害がかなり酷くなった。

しかしそこまでされても亜人は国を出て行かなかった。否出て行けなかった。国を出ようとしても亜人は法外な料金を払わなければ出ることさえ出来なかったのである。結果亜人たちは町の片隅で隠れて過ごすようになった。無論この国にいるので亜人が全てなわけではない。外にはまだ多くの亜人が暮らしているだろう。しかし国を出れないのならそんなのはまるで意味がなかった。

そして亜人差別が始まってから５０年ほど経ったとき当時の王は亜人差別を禁止させこれを犯すものには重い罰を与えることにした。さらに自身が亜人たちに頭を下げることにより亜人たちもある程度溜飲が下がった。

王は亜人差別をなくす次の手として亜人、獣人、人間種族に関わりなく能力さえあれば入学することができる学校アライアンスを設立。アライアンスを成績優秀で卒業することができたら将来は安泰・・・そう言える制度を作った。この学校と王の尽力により亜人、獣人差別は徐々に消えている。しかしまだ貴族には根強い亜人、獣人差別が残っている。

歴史書はそう締めくくられていた。しかしまさかノワール家がそんなに重要なポストにつく家だったとは。どうりでこんなにも強さを追求するわけだ。ところでなんで亜人と獣人は人間に仕返しをしないのだろうか?なんか理由があるのかな?

集中して読み過ぎた流石に眠い。もう寝るか。そう思った俺は自分の部屋に寝るために戻っていった……

ダサい父様

『『『お誕生、おめでとう!!』』』

「ありがとう、父様、母様、兄様、姉様」

どうも、察しのいい皆様なら、お気付きだろうか？今日は俺の誕生日である。何歳のかだって？

5歳のだよ。

そう速いものであれからもう4年経ったのだ。今まで毎日魔流と空間把握の修行をしてきたおかげで両方ともかなりの精度で行えるようになった。

今日が俺の誕生日ということは当然あれもある。

そうーーープレゼントである。しかし我がノワール家のプレゼントはおそらく普通のとは違う。いや絶対違う。そのプレゼントの内容とはーーーノワール家当主との組手である。それもただの組手ではない。剣術のみでなんと父さんが本気で相手をしてくれるのだ。やったね!!オラ、ワクワクしてきたぞ!!っと言いたいところだが残念ながら俺はそこまで戦闘民族ではない。余談だがこの道は兄さんも姉さんも通った道である。今兄さんはアライアンスの三年生として王都にいる。なんでも三年生にして（アライアンスは六年制）学園最強に数えられる程の剣術の天才だとか。

それは、さておき勝つのはほぼ不可能。あれ？これ無理ゲーじゃね？

「さぁ、エリー始めようか？」

「はい」

ザァー　風が吹き次第に緊張が高まっていく

シュッ　ドサッ

「ゑ？」

思わず声を出してしまった何故なら……

勢いよく飛び出した父さんが、盛大に転んだからだ……　はぁ？

僕はすかさず攻撃し、父さんは気絶した、こうして、僕の父さんとの試合は呆気ない形で幕を閉じた

日が変わった次の日の朝
「おはよう」
「グスッ」
「ほら（もう）、あなた（父様）、泣かないの（泣かないでください）！」
「だって～、息子との試合で転けて、気絶させられたんだぞ⁉格好悪過ぎるだろ？ハッ、ハ
ハハハハハ。笑えるよな？フフフフ、アハハハハハハ」
親父が壊れた⁉ヤバイ、どうしよう？
「大丈夫ですよ、人間、誰しも失敗はします」
「そうか？」
このあと、めちゃくちゃ励まして機嫌を直してもらった。そんな事も、有ったが、この世界に生まれてから１４年もの月日が過ぎた
「エリー、アライアンス学園に行きなさい」
「はい」
そう、遂にあの、アライアンス学園に行く年齢に成った、あれから、色々あって俺も強くなった
名前エリオット・ノワール
性別　男
年齢　１４
Ｌｖ　５０
種族　人間
状態　正常
ＨＰ　１００００／１００００
ＭＰ　８０００００／８０００００
攻撃　５０００
防御　４５００
知力　９０００
器用　４０００
魔攻　８００００
魔防　８００００
運　１５０

スキル　魔法適正（全）　Ｌｖ――　身体強化　Ｌｖ５　剣術　Ｌｖ８　空間把握　Ｌｖ７　魔流　Ｌｖ１０　縮地　Ｌｖ　４　全魔法　Ｌｖ６　アイテムルーム　Ｌｖ――

ユニークスキル　魔眼（・魅了・予知・鑑定・虚無）　Ｌｖ――

色々増えてるが、まず、俺の強さだが、強い部類に入る、ステータスの平均は、運は７０位で、それ以外は１０００前後だ、さらにスキルは、３つ、有れば上々、Ｌｖも、１０が最大で、普通の人は１か、まずスキルを持っていないことが多く、１～３がおまけ程度、４～６で、スキル次第で魔獣を倒せる。７～９にも成ると、一人で軍隊を壊滅させることもでき、１０は至った人が少なすぎて基準がつけられない。俺は魔流が１０、剣術が８、空間把握が７なので、軍隊を一人で、潰せるレベルだ、因みに、全魔法は、無、火、水、風、土、光、闇、雷、氷、時空の魔法全てを、得た際に、無、火、水、風、土、光、闇、雷、氷、聖、時空の魔法が、結合されたスキルだ。魔眼も一つ作った、虚無の魔眼と言い、眼で見た対象に、幻をみせたり、起きた事象を、無かったことに出来る。と言う能力だ

容姿はかなりイケメンで銀髪、背も高い。

勉強に関しては世界全体で九九が言えれば天才とかいうレベルで、日本の義務教育で十分足りる処か、高過ぎるレベル

容姿、勉学。何を取っても完璧な非の打ち所の無い、完全無欠な少年。と言うのが、僕こと、エリオット・ノワールの世間の印象で、許嫁は、家と並び、王家の盾と呼ばれている、シーガス・ルードさん、と言うかなり美人で、僕と彼女で美男美女夫婦なんて呼ばれてる、はっきり言ってリア充だ

まぁ、そんな事は置いておき学園に行くための準備をしなければならない

「マリーさん、大きい鞄を用意してもらって良いかな？」

「はい、只今」

「ありがとう」

マリーさんは、凄い、戦えるし綺麗で気も利く、歳は離れているが

嫁にほしいくらいに
「あらあら、勿体なきお言葉ですよ／／／」
　何でマリーさんは、顔を赤くしてるんだ？まっ、まさか？
「あの～、もしかして、マリーさんは、考えてることが解るんですか？」
「そんな事できないですよ？エリー様、途中から、声にでていましたよ」
　因みにエリーは、愛称だ親しい人は皆そう呼ぶ。自分では、マリーと似てて良いなーと思っている
「どっ、どのあたりからですか？」
　ヤバイ、何処からだ？
「歳は離れているが、からです」
「わっ、忘れください‼」
「はい、承知致しました」
　ふー、変な汗かいたー
　そんなこんなで、時間は過ぎ、いよいよアライアンス学園の試験の日が来た
「エリー、行くぞ」
「解りました、すぐに、行きます」
　馬車に乗り込み、椅子に座る
「エリー、試験頑張りなさい」
「はい！」
　僕が通うことになる、アライアンス学園は、実力主義の学校で成績が全て、成績が良ければ何をしても良く、成績でクラスが分かれていて、Ａクラス、Ｂクラス、Ｃクラス、Ｄクラス、Ｅクラス、Ｆクラス、と分けＡクラスが一番上で、Ｆクラスは一番下。Ａクラスには、王族にする様な、Ｆクラスには、平民以下の対応をする。貴族が通う学校で、そんな事が認められるのは、生徒に向上心が見られ、トップの成績が他の学校の何処よりも良いからだそうだ。差別を無くす為に作った学校が差別とか変な話だ。そんな事を考えていると、急に馬車が止まった
「だっ、旦那様、魔物が出ました」

「そうか、解った。エリー、一人で行けるか？」
「はい」
　因みに魔物と言うのは、魔獣の今の言い方で、モンスターとも、言われている
「行ってこい」
　僕は、頷き、馬車から、飛び出す
　”アイテムルーム”心の中で唱え、デュランダルを取り出し、駆け出す、魔物は、グリーンウルフと呼ばれるモンスターで、風魔法を使ってくるのが、特徴だ
　俺は縮地を使い、級接近し、デュランダルで切り裂く
「クギャァァァァァ」
　グリーンウルフが絶命した”アイテムルーム”グリーンウルフの死体をアイテムルームに入れ、父に報告しに行く
「父様、倒しました」
「よくやった、怪我は無いか？」
「はい、当然です」
　馬車の椅子に、少し疲れたので横になる
「おい、起きろ！起きろ！」
「おはようございます？」
　どうやら、寝ていたようだ
「着いたぞ！」
「はい、ありがとうございます」
「いい加減、その、他人行儀な話し方をやめんか？」
「やめたいんですが、癖で……」
　本当に癖で話し方が着いてしまって直らない
「頑張りなさい、頑張ってＡクラスに行ってこい」
「はい！」
　父さんが、応援してくれたんだ、絶対Ａクラスに行ってやる！
　あれから数時間が立ち筆記試験が全て終わった、正直、拍子抜けだった
「どうだった？」

父さんが聞いて来る
「自己採点ですが、全て満点でした」
「そっ、そうか。実技も頑張れよ」
「はい」
更に数時間が立ち実技試験も終わった、のだが……　簡単すぎた、魔法で的当てに、体力検査意味わからん
「帰るぞ？」
「解りました」
「どうだ？難しかったろ？」
帰路の馬車の中で、父さんがそんな事を聞いてきた
「凄く簡単でしたが？」
「そんなわけ無いだろ？魔法での対象破壊とか有っただろ？」
「有りましたが、一発で壊れましたよ？」
実際、攻撃力の低い水魔法の水の弾丸？アクアショット？で壊れた
「お前、魔流スキルを持ってたりしてな？なんてな？ハハハハ」
「持ってますよ？」
「嘘だろ⁉」
「本当ですよ???」
意味が解らない、持っていたら駄目なのか？
「エリー、ステータスの閲覧許可を出してくれんか？」
「良いのですが、どうやるのですか？」
「閲覧許可っと、心の中で対象を思い浮かべながら唱えると、できる」
「やってみますね？」
”閲覧許可”対象：父さん、『閲覧を許可しますか？Ｙｅｓ／Ｎｏ』急に声が聞こえたのだが、気にせずＹｅｓと、念じる
「どうですか？僕のステーｔ「凄い‼」そうｄ「凄すぎる‼魔流だけでなく、全魔法まで‼」それは、凄いのですか？」
「凄いぞ！物凄く凄い！なんせ、魔流は魔王が、全魔法は賢者のみが使えたというスキルなんだからな？」
マジで？ヤベースキルもってんじゃんｗ魔流Ｌｖ１０やし

「スキルＬｖは、魔王いくつだったんでしょうか？」
「３だったと、言われている、あれ？お前確か・・・・・　何だった？もう一度、閲覧許可出してくれんか？」
「嫌です、お断りします‼」
　俺の１０だぞ⁉軍隊潰せるどころじゃねぇ、余裕で国潰せそうなんだが⁉
「そ、そうか、強要はせんが」
「ありがとうございます」
　そんな事を話していると家に着いた
「エリー、試験は、どうだった？」
　母さんが聞いて来る
「正直簡単過ぎで、拍子抜けでした」
「そう？Ａクラスに行けると良わね？」
「は、はい・・・」
　まぁ、確実にＡクラスだろ～な～ハ、ハハハハ
　ケッカガタノシミダナ～

第1章～アライアンス学園にて・・・・・　～

Sクラス

（簡単すぎる）試験を受けてから、数日が過ぎた

トントン

俺の部屋のドアを誰かがノックする

「入っても良いか？

と、入室の許可を求める声が聞こえてくる。この声は父さんか、と思い

「大丈夫ですよ？」

と答える

「エリー試験の結果が届いた、一応言っておくがまだ誰も見ていないぞ？まぁーその、なんだ？結果がどうあれ来年の振り分け試験を頑張ればいいのだから。な？気を落とすなよ？」

そう言い残し父さんは部屋を後にした・・・　ゑ？そんなにダメな結果だったのか？振り分け試験、アライアンス学園に通う三年間の中で一年生と、二年生の終わりに行われる、クラスが変え的な試験のだ。因みにクラスが変わる可能性はめちゃくちゃ低いらしい。怖っ！え？Fなの？筆記？え？何にがダメだったんだ？分からんわ～ｗｗｗｗｗｗｗｗよし、見るか！

手紙には、特に封はされていなかったので、普通に手紙を開けると、紙が一枚入っていたので広げる

エリオット・ノワール殿、貴殿は、大変規格外な成績を収めたため・・・

Sクラスでの入学になります

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
はぁ?きかくがい?規格外?企画外?あ～、この程度じゃ話にならん無いから出直せと?な、馬鹿な!勉強頑張ったのに!報われなかった!誰だよ、努力すれば報われる説を提唱した奴。
でも入学はできるんだよな?企画外って…　そう思い、再び紙に目を向けると、書かれていたのは、規格外と言う文字とSクラスって?
えすくらす?Sクラス!意味わからんは!ABCDEFしかないんじゃないん?
ｓｐｅｃｉａｌのSかな?Aより上なのかな?訳わからんかな⁉
あれ?俺なに言ってるんだっぺ?↑どこの方言?
走って父さんのもとへ向かう
父さんの部屋の前についた
ダッ　ダッ　ダッ　ダッ　ダッ　ダッ　ダッ
スゥーーーー、ハーーーーー、スゥーーーー　よし!落ち着いた
「と、と、と、と、と、と父様、Sクラスで入学とか、馬鹿みたいなこと、書かれてたんですけど⁉」
訂正、全然落ち着けてなかった
「えすくらす?あぁ～、Fクラスか、そうか…　残念だったな?しかし、諦めず2年生の振り分け試験はAクラスに入れるように、頑張れよ」
父さんが憐れむように、言ってくる…　って違うわ!
「Fクラスじゃありません!Sクラスです!ほら」
そう言い僕は、父さんに結果が書かれた紙を見せる
「実在したんだ……　エリー、中庭に来なさい」
そう言い父さんは、中庭に向かい歩いていった
どう言う事だろう?実在したんだ?中庭?

ｓｉｄｅ　オルザー
どうも、俺の名前は、オルザー・ノワールと言う。先ほど話していたエリオット・ノワールの父親だ。ん？初めて出た時と、話し方が違うって？初めて出た、と言う意味は分からないが、まぁ、一様、子供達や、メイド、執事達と話す時は、威厳に溢れたノワール家当主、オルザー・ノワールを演じている。
あれ？さっきから、誰に説明してるんだ？まぁ、良いか、なんて考えてる内に中にはに着いたようだ
数分ほど待っていると、エリーが来た
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
父さんに呼ばれ、中庭向かって歩いている内に、自分なりに色々考えてみた、何故に中庭に呼ばれたのか？Ｓクラスについて父さんがナニを知っているのか？頑張って考えてみたものの全く検討もつかなかった。数分ほど歩いていると、父さんが見えてきた。
「剣を持て」
唐突にそう言い放つ父さん、一応指示に従いアイテムルームから訓練用の刃を潰してある剣を取り出す
「どうゆうことでｓ「問答無用」おっとー、危な！」
急に斬りかかってきた、間一髪でギリギリいなしたがヤバイなやっぱり強い
「エリー、５歳の誕生日には負けたが今回はそうはならんぞ！どんなてを使っても良い俺を倒せ」
「わかりましたよ！っと、パラライズ」
パラライズは初級の雷魔法で、相手を麻痺させることができる。その魔法を俺は、父さんか
に向かって放つ、が、父さんはそれを紙一重にいなす。
「甘いぞ！」
カキーン
父さんの降り下ろした剣をギリギリで弾き、剣のぶつかり合う音が中庭にただただ響き渡る。
先程、簡単にいなされたため、今度はどの魔法かわかないよう、無

詠唱（と言っても心の中で唱えるのだが）で魔法を打つ、、グローム”俺が放ったグロームは、確かロシア語で雷と言う意味だった筈だ。その名に相応しく、雷の如く稲妻をたなびかせ、勢いよく父さんに向かって行き、見事ｃｌｅａｎ　ｈｉｔし、父さんは麻痺した。てか、グローム初級なのにやっぱ強⁉

上位魔法なだけあるなー。

「見事だった」

そんなことを考えるのも束の間、父さんの麻痺が解けたようだ

「まさか、本気で戦って負けるとは・・・　Ｓクラスに行けるだけの実力は十分にあるんたな・・・　よし、エリーＳクラスについてお前に教えよう、と言っても噂程度で聞いたことしかないのだがな？Ｓクラスと言うのは・・・・・・・・・・・・・・・」

なん、だと？・・・　そんな、嘘、だろ？ゑ